

*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*の經典読誦と *Abhisamayālaṅkāra*の信解理解

古 坂 紘 一

(平成18年 8 月21日受理 最終原稿平成18年10月 5 日受理)

In the Early Mahayāna Buddhism the Sūtra-cult was regarded having more merits than the Stūpa-cult. But it was considered that the practice of recitation of *Prajñāpāramitā* in the Sūtra-cult is able to function by the *adhimukti*. *Abhisamaya lankā rā loka* according to *Abhisamayalankara - karikā* comments the *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra*, and defines the phrases of the Sūtra in the 3rd and 4th chapter as representing the *adhimuktis*. So the Sūtra-recitation is implied as the aspects of *adhimuktis*.

Key Word: Sūtra-cult *Prajñāpāramitā* Sūtra-recitation Sūtra-writing *adhimukti*

1 序

1. 1 筆者はかつて薬師寺最勝会、高野山御最勝講、およびネパールのKuwā Baha寺院における『八千頌般若経』の読誦儀礼などについて実態調査を試みたことがあるが¹⁾、それらの儀礼の中で大乘經典をちょうど仏像のように安置して供養し読誦が行なわれる理由について、仏教の内部で元来どのように考えられていたのだろうか、という疑問を持つに至り、やがて『八千頌般若経』(*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra*²⁾:以下APSと略記する)それ自体に、その疑問に対する一つの答えが与えられていることに気づいた。その内容を明らかにするために、ここに經典読誦の意義を示すAPSの箇所を、同経の注釈書である*Abhisamayālaṅkāra-loka* (以下*Āloka*と略記)の解釈を通して分析したい。論考に当たり、大乘仏教形成以前の經典読誦について調べ、大乘仏教の經典読誦の背景を視野に入れ、後世の密教儀礼的經典読誦との繋がりを予想しつつ、大乘仏教の經典読誦論を考察する。主な資料として大乘仏典の中でも特にこの問題の基準的思想を示すと考えられるAPSおよび*Āloka*を採り上げる。

1) 「ネパールにおける仏教儀礼管見」アジア学術セミナー、於東北大学国際文化研究科、2004.12.11 報告。

2) P.L.Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts, No.4, Darbhanga 1960: 以下Vd.と略記。

2 「読誦」の一般的概念と大乘仏教以前の「読誦」の用例

2.1 大乘仏教の読誦論を考察するに先立ち、まず読誦に関する一般的な概念を把握しておきたい。

經典の読誦はもちろん宗教的行動の一種にはちがいない。宗教学者岸本英夫は『宗教学』の中で、宗教的行動としての修行の方法を論じて、次のように述べている。

「人間には、生理心理的な構造上の制約がある。人間が、繰返しておこなうことのできるような簡単な行動様式というものは、それほど、種類の多いものではない。比較的に限られている。古来の宗教的修行の形態を眺めてみると、その生理心理的に可能なものは、ほとんどすべてをとりあげて、これを活用している。」³⁾

そして具体的な修行方法として、唱え言や読経などの発声的行為の外に、書写行、巡礼、山岳修行、呼吸法、観相法、禪、祈り、苦行等を挙げている⁴⁾。

2.2 読経は読誦ともいう。読誦について、『佛教大事典』では次のように説明されている。

「仏典を音読（読）、または暗唱（誦）すること。いずれも声を出すので読経（どきょう）といい、目読としての看経（かんきん）と区別することもあるが、一般には目読を含めて仏典を読むことを読誦と称する。多くの大乘經典はその受持（理解と記憶）・読誦・解説（げせつ、他人に対する意味内容の説明）・書写を功德あるものとして奨励し、中国・日本では死者の追善供養、除災招福のための読誦などが普及した。またこれには全体を通読する真読（または信読）、経題などを拾い読み、あるいは経巻をめくるだけの転読（または略読）、心で読む心読、身をもって実践修行する色読（または身読）などの区別がある。」⁵⁾

日本で何らかの仏教儀礼が行われる時、殆どの場合に、供養、称名礼拝とともに、読経、即ち經典の読誦が勤修される⁶⁾。經典読誦はしかし儀礼の場面のみに限らず、広く宗教的修行の一環として行われるが、儀礼において聖典のことが誦えられることは、インドでは元来バラモン教のヴェーダ読誦の習慣として、すでに仏教興起以前から形成されていた。

2.3 ヴェーダの「読誦」はサンスクリットではsvādhyāya (sva-adhyāya)という語で表されるのが一般的であるが、原義は「独自で唱える」、「自身に対してつぶやく」という意味であった。その語が転じて、口承のヴェーダの聖典を唱えること、ひいてはヴェーダ自体を意味することともなった⁷⁾。

3) 岸本英夫『宗教学』大明堂, 1961, p.73.

4) 前掲書 p.73-76.

5) 古田紹欽・金岡秀友・鎌田茂雄・藤井正雄編『佛教大事典』小学館 1988, p.726, 「読誦」（江島恵教）。

6) 澤田篤子・古坂紘一編『薬師寺最勝会の形成過程の研究－儀礼・音楽における伝承・創造の視座から－』（平成13-15年度科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書）2004, p.11参照。

7) Cf. Vaman Shivaram Apte, *The Practical Sanskrit-English Dictionary*, Revised and Enlarged Edition, Poona, 1959, p.1976, sva-.

初期の仏教においても、

「読誦しなければ聖典が汚れ、修理しなければ家屋が汚れ、身なりを怠るならば容色が汚れ、なおざり（放逸）になるならば、つとめ慎む人が汚れる。」⁸⁾

Asajjhāyamalā mantā anuṭṭhānamalā gharāmalaṃ vaṇṇassa kosajjaṃ pamādo rakkhato malan' ti.⁹⁾

と説かれ、聖典読誦は宗教的修行の重要な方法と見なされていた形跡がある。因にここに言われる「読誦」(sajjhāya)はサンスクリットのsvādhyāyaに対応するパーリ語である。ただこの場合の聖典(manta)はmantraすなわちヴェーダ本文のことで、したがってこの聖典読誦は「家屋の修理」と同様に、不放逸行を実践する仏教的修行を喩えるために言われているものであり、この語句によって直ちに初期仏教の段階で仏教経典の読誦が行われたことを推定することはできない。

2.4 しかし「読誦」は比較的古い仏典の中でも、実践すべきこととして言われているので、大乘仏教興起以前から仏教でも勧奨されていたことは明らかである。例えば『雑阿含経』に、

「世尊諸の比丘に告ぐ。汝まさに（有）漏・無漏の法を受持し、広く人の為に説くべし。

所以は何ぞ。義具足の故に。法具足の故に。梵行具足の故に。神通を開発して正しく涅槃に向かう乃至信心の善男子、在家、出家は、まさに受持読誦して広く人の為に説くべし。」¹⁰⁾

という。この経文は、経の受持・読誦が行われる意義をよく表している。そうすることによって、教義、理法、清浄行を身につけることができるという自利の面がまず説かれている。

2.5 また時代の如何はともかくとして、諸部派の律の中でも読誦のことはしばしば言及されている。例えば根本説一切有部の律の一種に勝友が編集した『根本薩婆多部律撰』（義浄訳）があるが、その九十波逸底迦法の第六学処として、比丘比丘尼以外の者に与うるに読誦を同じくすることは波逸底迦（pacittiya; Skt. prayascittika：波逸提、墮罪、懺悔を要する罪）であるとする規制がある。その事例として、世尊が祇園精舎に滞在された時、六人の比丘が比丘比丘尼以外の者と共に声を斉しくして読誦すること婆羅門のようにし、やかましく騒ぎ、精舎を混乱させた（誼譚雑乱し譏損を致招した）、そのことに由り、比丘が比丘比丘尼以外の者とともに同じ句を読誦し法を教授する者は墮罪である、と制せられたという。¹¹⁾このことは

8) 中村元訳『真理のことは 感興のことは』241, 岩波文庫 1978, p.44. 訳注：「聖典」(manta)とはヴェーダ聖典の本文のことである。バラモンたちは朝夕これをとなえる。Cf. 荻原雲来訳『法句経』岩波文庫 1935(1960), p.67, 「不誦を曼怛羅の垢とし、不動を家の垢とし、懈怠を色の垢とし、放逸を護者の垢とす。」脚注：「曼怛羅—古印度宗教の聖典なる吠陀の本文にして婆羅門の朝夕に誦すべきもの。」

9) *Dhammapadamthakathā*, ed. by H.C.Norman, Pali Text Society, Vol.III, 1970, p.347.

10) 大2, p.316c.

11) 大24, p.575a.「爾時薄伽梵在室羅伐城給孤独園。時六苾芻共未近円人、斉声読誦、如婆羅門。誼譚雑乱、致招譏損。由教授事、制斯学処。若復苾芻与未近円人、同句読誦教授法者、波逸底迦。」

古 坂 紘 一

実際には部派仏教の間で読誦がよく行われていたが、読誦の仕方が問題にされたことを示している。

2. 6 大衆部の『摩訶僧祇律』（仏陀跋陀羅・法顕共訳）巻第27には、

「若し比丘布薩にて波羅提木叉を説く時、賊入れば即ちまさに更に余の經を誦すべし。

若しは波羅延、若しは八跋耆經、若しは牟尼偈、若しは法句」¹²⁾

と指示されている。このうち「波羅延」とは『スッタニパータ』の最後の第五章、Pārāyana-vaggaのことである。Pārāyana (Skt. Pārāyaṇa) とはヴェーダ附属文献や文法学書でもとは、「聖典を読誦すること」、また一般に「聖句集成」を意味する¹³⁾。したがってその題名に「聖典を読誦すること」という意味が含まれているこの經は、それ自体かなり早い時期から読誦されていたものと考えられる。「八跋耆經」の跋耆はvaggiya（部分からなる）の音訳と考えられるが、「八跋耆經」は『スッタニパータ』の第四章Aṭṭhaka-vaggaを指すとされる¹⁴⁾。この經をある比丘が誦したところ、世尊がその意味の理解を問いただした。すると比丘は一つよく答えたので、世尊は是とした旨、『摩訶僧祇律』巻第23に記されている¹⁵⁾。また「牟尼偈」は『スッタニパータ』の第一章の最後の15偈からなる *Muni-sutta*、「法句」は『法句經』（*Dhammapada*）であると考えられる。

ともあれこれらの記述から、大衆部では、読誦には賊を退散させる力があると考えられ、読誦に際しては意味の理解がなければならぬとされていたことが知られる。

3 *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā* の「読誦」の用例

3. 1 このように、大乘仏教興起以前から經典の読誦が宗教的修行の一環として行われていたことは確実である。

次に大乘仏教の經典読誦の思想を、初期大乘仏教經典の一つとされる『八千頌般若經』をもとに考察したい。

『八千頌般若經』（*APS*）の単独の原典としては、

(1) サンسكريット本：P.L.Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Buddhist Sanskrit Texts, No.4, Darbhanga 1960.¹⁶⁾

(2) チベット語訳：'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa.

12) 大22, p.447c.

13) 中村元訳『ブツダのことば』岩波文庫 1984, p. 410.

14) 前掲書p. 377.

15) 大22, p.416a.「仏問比丘、汝誦經不。答言誦。誦何等經。誦八跋耆經。仏言。汝可誦之。即細声誦已。問於句義一一能答。仏言。善哉善哉。比丘。汝所誦者文字句義、如我先説。」

16) 以下Vd.と略記。

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayalāṅkāra* の信解理解

(『聖般若波羅蜜多八千』東北No.12, 大谷No.734, Śākyasena他訳)¹⁷⁾

(3) 漢訳：施護訳『仏母出生三寶藏般若波羅蜜多經』(大, No.228, 施護訳) が現存する。

また英訳にはEdward Conze, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Calcutta 1958がある。

現代日本語訳は『大乘仏典』¹⁸⁾と『仏典』¹⁹⁾に収められている。(以下の日本語訳は基本的には『大乘仏典』の訳に依ったが、必要に応じサンスクリット・チベット語訳・漢訳に依拠して訳語を改変した。)

3.2 APSの第3章に、世尊が帝釈天(シャクラ=インドラ)即ちカウシカ(Kausika)に対して読誦を命ずる次のような一節がある。

「カウシカよ、お前は知恵の完成を読誦しなさい。それはなぜか。阿修羅たちにこのような意図が生ずるであろうから。『われわれは三十三天の神々たちと闘おう。三十三天の神々たちと戦場にまみえよう』と。そのとき、カウシカよ、お前はこの知恵の完成に注意を集中しなさい。それを読誦しなさい。そうすればかの阿修羅たちのその意図はたちどころに消えてしまうのだ。」²⁰⁾

svādhyāyatvaṃ Kauśika prajñāpāramitāṃ / tat kasya heto(h) ? yadāhi Kauśika asurāṇaṃ evaṃ rūpaḥ samudācārā utpatsyante- devāṃs trāyastriṃśān yodhayiṣyāma iti, devāṃs trāyastriṃśaiḥ sārḍhaṃ saṃgrāmayiṣyāma iti, tadā tvaṃ Kauśika imāṃ prajñāpāramitāṃ samanvāhareḥ, svādhyāyeḥ, evaṃ teṣāṃ asurāṇāṃ te samudācārāḥ punar evāntardhāsyanti//²¹⁾

この内容は『摩訶僧祇律』の、賊を退散させるために読経するべしという内容と共通する。

そのように、APS第3章から第4章にかけて、読誦等の功徳を強調する文が展開するので、それらの章に焦点を当てて読誦信仰について検討したい。

第3章は「(知恵の)完成とストゥーパ(塔)との尊敬に無量の功徳のあること」(Aprameya-guṇa-dhāraṇa-pāramitā-stūpa-satkāra-parivataḥ)、施護訳では「宝塔功徳品」である。第4章は「(知恵の完成の)徳性の称揚」(Guṇa-parikīrtana-parivartaḥ)、施護訳では「称讃功徳品」と題せられている。

3.3 第3章ではまず、世尊が神々や出家・在家の人々に向かって、

「神々にせよ、良家の男子、女子にせよ、この知恵の完成(般若波羅蜜多)を習い、覚え、唱え、理解し、宣布するであろうものは、魔も魔に従属する魔神たちも、いかに彼の

17) 本論では北京版を使用。Pk.と略記。

18) 梶山雄一・丹治昭義訳『大乘仏典』2,3,中央公論社,1974,1975..全訳。

19) 中村元編『仏典 II』(世界古典文学全集 7)筑摩書房,1965所収、平川彰訳「八千頌よりなる般若波羅蜜經」第1,2,3,30章。

20) 前掲書2, p.102-103.

21) Vd.. p.36,1.25

古 坂 紘 一

弱点を捜し、弱点を求めても、弱点につけいることができないであろう。また、その良家の男子や女子の弱点を捜し、弱点を求めている人間や人間に非ざるものたちも、弱点につけいることができないであろう。また、かの良家の男子や女子は横死することもないであろう。」²²⁾

yo hi kaścid devaputrāḥ kulaputro vā kuladuhitā vā imāṃ prajñāpāramitāṃ udgrahīṣyati dhārayīṣyati vācayīṣyati paryavāpsyati pravartayīṣyati, na tasya māro vā mārakāyikā vā devatā avatāra-prekṣṇyo 'vatāra-gaveṣṇyo 'vatāraṃ lapsyante / nāpi tasya kulaputrasya vā kuladuhitur vā manuṣyā vā amanuṣyā vā avatāraprekṣiṇo 'vatāragaveṣiṇo 'vatāraṃ lapsyante / nāpi sa kulaputro vā kuladuhitā vā viṣamāparihāreṇa kalam kariṣyati //²³⁾

ここでは「唱えるであろう(vācayīṣyati)」「宣布するであろう(pravartayīṣyati)」という語が漢訳で「読誦如説修行」と訳されている。svādhyāyatiという語はここに用いられていないので、「読誦」が必ずしもsvādhyāyatiの訳語とは限らないことに注意しなければならないが、取意識として誤訳とは言えない。般若波羅蜜多を習い、覚え、唱え、理解し、宣布することには、魔等につけいる隙を与えない威力があるとするのが主旨である²⁴⁾。第3章の上述の部分で言われていることと同じ趣旨である。

次いで、般若波羅蜜多を習い、覚え、唱え、理解し、宣布するものに対する神々の近づき、怖れ(bhaya)や硬直(stambhitatva)の無いこと、四天王・帝釈天・大梵天・梵衆天の護念(rakṣāvaraṇa-guṇa)が約束される²⁵⁾。

その後、第3章から第5章の終わりまで、帝釈天が次々と世尊に質問するのに対して世尊が答える形式になっているが、後述のように、読誦等に働く「信解」が言い表されていると解釈

22) 『大乘仏典』2, p. 74-75.

23) Vd.p. 25, l.7 ; Tib.: Rigs kyi bu'am rigs kyi bu mo gang la la shes rab kyi pha rol du phyin pa 'di 'dzin tam 'chang ngam klog gam kun chub par byed dam rab tu 'don na / de la bdud dam bdud kyi ris kyi lha glags lta ba dang glags tshol ba dag gis glags rnyed par mi 'gyur ro // rigs kyi bu'am rigs kyi bu mo de la mi'am mi ma yin pa glags lta ba dang glags tshol ba rnams kyis glags rnyed par yang mi 'gyur ro/ rigs kyi bu'am rigs kyi bu mo de yang yang ba ma spangs pas* 'chi bai dus byed par mi 'gyur ro/(Pk.29b5) 施護訳：若有善男子善女人。於此甚深般若波羅蜜多法門能聽受讀誦。如説修行者。是人不為魔及魔民人非人等伺得其便。不為惡毒所能傷害。不以橫夭捨其壽命。(大8, p. 594c.) *Cf. MVy. 6957, Viṣamāparihāraḥ: Yañ na-ba mi spoṅs-pa. Yañ-ba mi spoñ ba 未だ危険を避けざること。

24) 經典の受持あるいは読誦にそのような力があるとする表現は『法華經』の「藥王菩薩本事品」「陀羅尼品」「普賢菩薩勸発品」等にも見られる。

25) 『大乘仏典』2, p. 76, Vd. p.25.

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

されたのは第3章と第4章である。そのうち第3章のはじめの部分では読誦の現世利益が種々説かれる。例えば、

「カウシカよ、知恵の完成（般若波羅蜜多）を習っている（udgrhī tāyaṃ：会得する、受持する）ときには、六種のすべての完成を習っているのである。（中略）カウシカよ、ある人々は私の教えに対して論争をしかけようと思い、抗弁しようと思い、対抗しようと思うであろう。そういう、論争しようと思ひ、抗弁しようと思ひ、対抗しようと思ひしている人々に起こる論争、抗弁、対抗は生ずるにつれて消えてしまって、持続することがない。（中略）この知恵の完成を習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦する良家の男子や女子にとっては、このようにつぎつぎに起こってくる争点（adhikaraṇa）はたちどころに消えてしまって、持続しない。（中略）その人はこのような現世の利益をも取得するのである。」²⁶⁾

という。

ここに登場する「習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦する（udgrahīṣyati dhārayīṣyati vācayīṣyati paryavāpsyati pravartayīṣyati deśayīṣyati upadekṣyati uddekṣyati svādhyāsyati）」という句は、施護訳では単に「受持読誦」とのみ訳されているが、チベット語訳では、

'dzin pa dang 'chang ba dang klog pa dang kun chub par byed pa dang rab tu
'don pa dang ston pa dang nye bar ston pa dang lung 'gogs pa dang kha ton du
byed pa (Pk. 31b2-3)

（把握し、保持し、読み、理解し、発言し、説き、教え、伝え、読誦する）

となっている。「読誦する(kha ton du byed pa)」は、心から声に出して読むことである²⁷⁾。したがってsvādhyāya, kha ton du byed paの訳語としての読誦は、この場合、読と誦を分けて考えることのできる用語ではなく、むしろ、心読と音読を合わせた読み方であると言える。これに対し、vācayatiは読誦と訳される場合もあるが、この場合のvācayati（唱える）=klog pa（読む）は音読を意味すると考えられる。

4 *Abhisamayālaṅkāra* の注解

4.1 APSの発展拡大である『二万五千頌般若経』の内容を整理し273頌に要約した弥勒(Maitreya) 造の注釈書 *Abhisamayālaṅkāra* (『現觀莊嚴論』) を註釈しつつ、ハリバドラ

26) 『大乘仏典』2, p.77, Vd. p.26. Dg.ka 29a-b: Pk. 30b-31a, 大 8, p.595a.

27) kha ton: the saying by heart (H.A.Jäschke, *A Tibetan-English Dictionary*); kha ton or kha 'don: svādhyāya, anupaṭh, a reading or reciting from memory (Ch.Das, *Tibetan-English Dictionary*).

(Haribhadra) は、その科段分類と内容を依用して、APSの注釈を二つ作った。すなわち、

- (1) *Ārya-Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-vyākhyābhisamayālaṅkāra-loka-nāma* (『聖般若波羅蜜多八千(頌)解説現觀莊嚴明』Tib.:東北No.3791, 大谷No.5189.: *Āloka*)²⁸⁾
- (2) *Abhisamayālaṅkāra-nāma-prajñāpāramitopadeśa-śāstra-vṛtti* (『般若波羅蜜多優波提舍論現觀莊嚴論と名づくる駐』Tib.:東北No. 3793, 大谷No.5191)²⁹⁾

である。

*Āloka*によると、APSの第2章の途中(Vd. p.22,1.6)から第3章途中(Vd. p.28,1.28)までを、菩薩の見道論として位置づけている。(Śāstra-vṛttiにおいても科段の解釈については*Āloka*の解釈と異ならない。)

第3章の見道部分では、種々の現世利益や戦場での守護等の功德が得られるとし、般若波羅蜜多(經)を読誦する場所はチャイトヤ(塔廟、制多、支提)となっているとする。

そしてAPSの第3章から第4章までを、菩薩の有漏の修道論として位置づけている。修道部分では、まずストーパー(塔)供養の様々なあり方が説かれる。しかし、どのような仏塔供養の功德よりも、經典の受持読誦はより多くの福德を得るというのである。そして色々な段階の仏塔供養が比較の対象として語りだされる³⁰⁾。

4.2 APS第3章、第4章で經典崇拜の段階を*Āloka*は*Kārikā*に従って、読誦等の功德をadhimukti(信解)の諸相として捉え、注釈している³¹⁾。

Adhimukti(「信解」)は玄奘訳の『瑜伽師地論』などでは「勝解」とも訳される。AdhimuktiについてE.Obermillerはfaith³²⁾(信念)、E.Conzeはresolute intent³³⁾(不屈の意志)と訳し、

28) いわゆる『大註』。前掲Vd本所収。Unrai Wogihara ed., *Abhisamayālaṅkāra-loka Prajñāpāramitāvyākhyā The Work of Haribhadra*, Tokyo1932 (1973) (以下Wogiharaと略記)。

29) *Āloka*の略註で、『小註』と称せられる。別名 *Sphuṭārthā*。真野龍海『現觀莊嚴論の研究』山喜房仏書林、1972, p.4参照。同書に『小註』の和訳が収められている。チベット語訳から還元したサンスクリット本として、Rām Saṅkar Tripaṭhī ed. *Abhisamayālaṅkāravṛttiḥ Sphuṭārthā*, Vārāṇasī, 1977がある。なおHirofusa Amano ed., *Abhisamayālaṅkāra-kārikā-śāstra-vivṛti*, Kyoto, 2000は『小註』のサンスクリット写本にもとづく校訂出版本である。

30) 大乘仏教の起源の期限論については平川彰博士の仏塔崇拜起源論が有名である。(『初期大乘仏教の研究II』平川彰著作集第四巻 1990, p.445参照)しかし仮に仏塔崇拜に大乘の起源があるとしても、ここに明らかなように、『八千頌般若經』では、仏塔崇拜を重んじつつも、それとは異なった經典崇拜の修行觀が明確に示されている。このことは經典崇拜が、仏塔崇拜とは異なった大乘仏教の或る一つの起源にかかわることを示しているであろう。

31) ここでは、*Āloka*においてadhimuktiの諸相としての經典崇拜が論及される第3章と第4章のみに限って考察する。

32) E.Obermiller, *Prajñāpāramitā in Tibetan Buddhism*, (ed. by H.S.Sobti) New Delhi, 1988, p.38.

33) Conze: p.26 etc.

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

F. Edgerton は Strong inclination, attachment (強い傾向、愛着) ; Earnest, zealous application (真剣な、熱心な志願) というように説明を施し³⁴⁾、また H. Dayal は *aspiration*³⁵⁾ (熱望)、N. Dutt は *strong desire* (強い欲求)、*aspiration*³⁶⁾、L. Schmidhausen は *gläubiges Vertrauen*³⁷⁾ (信心深い信頼) と訳している。『大乘仏典』では「傾倒心」と訳している。

これらによる限り、*adhimukti* は、「信念にもとづく強い志向性」を意味すると云えよう。

4.3 *Abhisamayālaṅkāra-kārikā* によると、この *adhimukti* の作意 (*manasikāra*) は、*pariṇāmanā* (廻向)、*anumodanā* (随喜) の作意に並ぶ有漏の修道の第一として位置づけられている³⁸⁾。

頌にもいう。

信解は三種。自利と自利利他および

利他なりと知るべし。而してその各々に

また三種が求められる。

軟(下)・中・上と軟々(下の下)等の区別から

それはまた三種なり。かくて

二十七種が考えられる。

adhimuktis tridhā jñeyā, svārthā ca sva-parārthikā

parārthikāivety eṣā ca pratyekaṃ trividheṣyate // (18)

mṛdvī madhyādhimātrā ca. mṛdu-mṛdv-ādi-bhedata

*sā punas trividhety evaṃ saptaviṃśatidhā matā // (19)*³⁹⁾

4.4 *Āloka* も、*Kārikā* に従い *adhimukti* を、自利・自利利他・利他の3種に分け、さらにそれらを下 (*mṛdu*)・中 (*madhya*)・上 (*adhimātra*) の3段階に分け、更にそれらをそれぞれ下・中・上に分け、合計27種の信解に分けて、それぞれを、APS第3章、第4章の経典

34) Edgerton はここでチベット語の対応語 *mos-pa* を挙げ、Jäschke の *A Tibetan English Dictionary* の次の説明を引用している。 *to be pleased, la with; to wish, to have a mind; to take pleasure in, to rejoice at; as substantive pleasure, satisfaction, esteem; also to respect, to esteem, to respect with devotion, to revere, to adore.* F. Edgerton, *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar And Dictionary*, Vol. II: Dictionary, Varanasi, 1970, p. 14 参照。

35) Har Dayal, *The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanskrit Literature*, (1932), Delhi, 1970, p. 53f.

36) Nalinaksha Dutt, *Mahāyāna Buddhism*, Delhi, 1977, p. 109, 132, 133.

37) Lambert Schmidhausen, *Der Nirvāṇa-abschnitt in der Vinīścayasamgrahaṇī der Yogācāra-bhūmiḥ*, Wien 1969, s. 180.

38) Rām Śaṅkar Tripaṭhī, op. cit., p. 32.

39) R. Tripaṭhī, op. cit.; Vd., p. 379; Wogihara, p. 282.

古 坂 紘 一

読誦、般若波羅蜜多の功德あるいは徳性として順次振り分けている⁴⁰⁾。

ここで把握された経は、次の表のように要約することができよう。

(付記) なお経文には同じ句が繰り返し用いられるが、それらを基本的には『大乘仏典』版に従い、A, B, C, D, Eと略記する。即ち、

A : この般若波羅蜜多を習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦。

imāṃ prajñāpāramitāṃ udgrhīṣyati dhārayiṣyati vācayiṣyati paryavāpsyati
pravartayiṣyati deśayiṣyati upadekṣyati uddekṣyati svādhyāsyati;⁴¹⁾

B : 神々しい花、薫香、香料、花輪、塗香、粉香、衣服、傘、幢、鈴、旗 (を供える)。

divyābhiḥ puṣpa-dhūpa-gandha-mālya-vilepana-cūrṇa-cīvara-cchatra-dhvaja-ghanṭā-
patakābhiḥ;⁴²⁾

C : 恭敬し、尊重し、奉仕し、供養し、讃嘆し、祈願。

satkuryāt gurukuryāt mānayet pūjayet arcayet apacayet;⁴³⁾

D : 誠信をささげて信頼し、信解して心が澄浄になった者が菩提心を発して憎上意樂をもって般若波羅蜜多を聴く。

abhiśraddadhad avakalpayann adhimucya prasanna-citto bodhāya cittam utpādyā
adhyāśayataḥ śṛṇuyād⁴⁴⁾

E : 「仏陀の道理⁴⁵⁾(般若波羅蜜多) が断絶しないように、正しい教えが消えないように、また

40) Vd.361²⁶⁾以下。

41) Vd.p.26, l. 25; Tib.:shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di 'dzin pa dang 'chang ba dang klog pa
dang kun chub par byed pa dang rab tu 'don pa dang ston pa dang nye bar ston pa dang lung
'bogs pa dang kha ton du byed pa (Pk. 31a4); 施護訳：於此般若波羅蜜多受持読誦、自所宣説或
為他説如説修行 (大8,p.595a20)

42) Vd.p.28, l.30; Tib.: lha'i me tog dang lha'i bdug pa dang lha'i dri dang lha'i phreng ba dang
lha'i byug pa dang lha'i phye ma dang lha'i na bza' dang lha'i gdugs dang lha'i rgyal mtshan
dang lha'i dril bu dang lha'i ba dan dag dang (Pk.33b6); 施護訳：以香華灯塗幢幡宝蓋種々供養
(大8, p.596a24).

43) Vd.p.28, l.32; Tib.: bkur stir bgyis pa dang bla mar bgyis pa dang rjed pa dang mchod pa
dang ri mor bgyis pa dang bsnyen bkur bgyis pa dang (Pk.33b8); 施護訳：尊敬受持作諸供養
(大8, p.596a28).

44) Vd.p.32, l.4; Tib.: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di la mngon par dang (Dg. dad) de rtog
cing mos la sems dang pas byang chub tu sems bskyed nas/ lhag pa'i bsaṃ pas nyan pa dang;
(Pk. 38a1); 施護訳：為欲趣求大菩提故、於此般若波羅蜜多発信解心 (大8, p.597a5).

45) Buddha-netrī; Tib.: sangs rgyas kyi tshul; MVy. 6325 正覚理趣。Cf. Conze: the guide of the
Thaṭagata (p. 26); 『仏典』 p.136:仏の導師; 『大乘仏典』 p.90: 仏陀の案内人。Tib.にもとづき、道理
と訳した。

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

道理が不足しないことによって菩薩摩訶薩たちに助けを与えることになるように」
mā Buddha-netrī-samucchēdo bhūṭ, mā saddharmāntardhānam/ bodhisattvānām
mahāsattvānām cānugrahopasaṃhāraḥ kṛto bhaviṣyati netryavaikālyeneti/⁴⁶⁾

信解の段階			経典崇拝の仕方	塔崇拝の仕方	Vd.	Pk.	大
自利	下	下	書写し安置；花・薫香等による供養BC	花・薫香等による供養	28 ²⁹	33b5	595c29
		中	不退転の菩薩の位に立つ;ABC;発心;信解		29 ²⁸	35a4	596a29
		上	楽しんで繰返し聞き習う;A		31 ²	36b5	596c1
	中	下	信解、発心;ABC	造七宝塔千万;BC	31 ⁹	37a2	596c11
		中	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC	造七宝塔満閻浮提;BC	31 ²⁶	37b4	596c27
		上	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC	造七宝塔満四大洲;BC	32 ¹³	38a7	597a14
	上	下	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC	造七宝塔満小千世界;BC	32 ³⁰	39a2	597b1
		中	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC	造七宝塔満二千大千世界;BC	33 ¹⁴	39b4	597b17
		上	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC	造七宝塔満三千大千世界;BC	33 ³⁰	40a6	597c4
自利 利他	下	下	DA;他の為に広説流布;解釈・吟味・熟慮;書写安置;BC 福德は100倍乃至1023倍。	三千大千世界満中衆生各々以仏 舎利造七宝塔; BC;以種々伎楽歌舞供養	34 ¹⁴	40b8	597c10

4.5 塔の崇拝供養と対比して、どの段階の塔供養よりも経典崇拝の方が勝れている、とするのは以上までであるが、第3章の以下の章句では経典崇拝の種々のあり方とそれぞれの功德が述べられる。*Āloka* はそれらを順次、より低い段階の信解からより高い段階の信解へと漸進的に位置づけている。

4.6 次に自利利他の下の中の信解の段⁴⁷⁾では、

シャクラ（帝釈天）に対し「般若波羅蜜多を習い、覚え、唱え、理解し、宣布し、説き、述べ、教示し、読誦せねばならない」と四万の神々によって要請され、また世尊によって命ぜられた。その理由について世尊は、阿修羅が帝釈天の率いる三十三天に戦いを挑んだ時に、

46) Vd.p.32, l.8; Tib.: sangs rgyas kyi tshul rgyun chad par ma gyur cig dam pai chos nub par ma gyur cig ces dam pa'i chos yun ring du gnas par bya ba dang/tshul dang ma bral bas byang chub sems dpa' sems dpa' chen po rnams la phan gdags pa bsgrub pa byas par 'gyur bar (Pk.38a3); 施護訳：仏眼不断正法不滅。而諸菩薩摩訶薩衆、各々受持宣布演説。即得法眼不壞不滅。(大8, p.597a8)

47) Vd.p.36.1.16; Pk. 43b2; 大8,p.598b10.

古 坂 紘 一

帝釈天がこの般若波羅蜜多に注意を集中し読誦するならば阿修羅の意図は消えてしまうからである、

と説く。ここにも読誦の悪魔的な者を退ける呪術的效果が述べられている。

ついで帝釈天により、

この般若波羅蜜多は、広大な明呪 (mahāvidyā) であり、無量明呪 (apramāṇa-vidyā)、無限明呪 (aparimāṇa-vidyā)、無上明呪 (niruttara-vidyā)、最勝明呪 (anuttara-vidyā)、無等明呪 (asama-vidyā)、無等々明呪 (asamasama-vidyā) である、

との想いが告げられた。また APS では、三世の諸仏は般若波羅蜜多に依るが故に阿耨多羅三藐三菩提を得たのであると世尊が応えられたとする。

よく知られるように、『般若心経』では、三世の諸仏が般若波羅蜜多によって阿耨多羅三藐三菩提を得られたが故に、般若波羅蜜多は、大神呪 (mahā-mantra) であり、大明呪 (mahāvidyā-mantra) であり、無上呪 (anuttara-mantra)、無等々呪 (asamaasama-mantra) である、と言われる。その句とこの帝釈天の告白は酷似しているが、APS では般若波羅蜜多は明 (vidyā) であるとするのみであって、『般若心経』のように呪 (mantra) とするまでには至っていない。しかし APS のこの箇所が、般若波羅蜜多が大神呪 (mahā-mantra) である云々という『般若心経』のことばの先駆けをなしていることは明らかである。

引き続き、功德について APS では、この般若波羅蜜多の明呪に依るが故に十善、四禪、四無量心、四無色定、六神通、三十七菩提分、八万四千の法蘊が世に出現し得、あらゆる仏智、自然智も世に出現し得るのであり、菩薩たちの善巧方便も皆般若波羅蜜多の明呪に依るが故に生まれるのである、とする。このような功德は、『般若心経』では「能除一切苦 眞実不虛」と極めて簡略化して言われている。

また APS のこの段に於いて次のように説かれる。

A に基づき多くの現世利益 (dr̥ṣṭadhārmika-guṇa) が得られる。即ち不慮のできごとによって死ぬることはなく、諸々の毒がその命を損傷することがなく、火に焚かれることもなく、水に溺れることもなく、刀剣杖によって苦しめられることもなく、他の力によってその命を損傷することもないであろう。王・王子・王室の大臣や宰相からもたらされる苦難も A によって消えてしまう。善男子善女子が A を行なっている時には、王などが近づいて来て彼等の欠点を見出す事はできない。それどころか王たちは善男子善女子に対して話したい、語りたい、挨拶をしなければならない、と考えるであろう。

upasaṃkrāntānaṃ ca teṣāṃ rājñāṃ vā rājaputrāṇāṃ vā rāja-mantriṇāṃ vā rājamahāmātrāṇāṃ vā ālapitu-kāmatāṃ bhaviṣyati, abhibhāṣitukāmatāṃ bhaviṣyati, pratisaṃmoditavyaṃ ca te maṃsyante /

それはなぜかと言えば、この般若波羅蜜多は、すべての有情たちに対して、慈しみの心による慈しみの行い、悲れみの心による悲れみの行いによって呼び起こされるからである。

tat kasya hetoḥ? iyaṃ hi Kauśika prajñāpāramitā sarvasattvānāṃ antike maitropasaṃhāreṇa maitracittatayā karuṇopasaṃhāreṇa karuṇacittatayā

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の經典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

pratyupasthitā / ⁴⁸⁾

外教の遊行者 (anyatīrthya-parivrājaka) が論難を意図して世尊に近づいた時にも、帝釈天が彼等の意図を察知し、般若波羅蜜多を読誦、宣布すると、遊行者たちは世尊の周りを右邊して離れて去って行った。悪魔波旬 (Māra Pāpiyas) が仏陀の集会を混乱させようとした時にも同様に帝釈天が彼等の意図を察知し、般若波羅蜜多を読誦、宣布すると、悪魔たちは退散した。

三十三天が世尊を讃嘆し、Aを行う者は如来によって尊敬される。なぜなら全知者性は般若波羅蜜多に基づいて求められるものであるからである。全知者性という大きな宝はこの般若波羅蜜多という大海から得られる。

以上のように、自利利他の下の中の信解 (adhimukti) の段は種々の現世の功德を述べる。

4.7 自利利他の下の上の信解 (adhimukti) の段⁴⁹⁾では、アーナンダが登場し、世尊は何故六波羅蜜多の他の波羅蜜多のことを宣べないで、専ら般若波羅蜜多のみを称賛しお述べになるのか、と尋ねる。それに対して、世尊は、般若波羅蜜多は他の波羅蜜多に先立つものであり、一切智性に回し向けられた (回向された) 善根であるが故に般若波羅蜜多は五つの波羅蜜多に先立つものであり、案内者、指導者となるのである。般若波羅蜜多と五波羅蜜多の関係は大地と播かれた種子の間の関係のようであると説かれた。

以下それぞれの段では、相應の功德、利益が得られるとする。

自利利他の中の下段⁵⁰⁾では、世尊とシャクラ (帝釈天) は、正法を永く存続させるために、般若波羅蜜多を書写し安置し、Cするならば、同じ現世の功德を得るという。

自利利他の中の中段⁵¹⁾では、般若波羅蜜多を読誦している善男子善女人には何百、何千、何十万という神々が近づき、説法者が話したいと思っていないときにも、善男子善女人にその説法者に、それらの神々は教えを重要であるとして、その説法者に話そうという意欲 (chanda 樂欲) が生ずるようになるべきであるとする。

自利利他の中の上段⁵²⁾では、その善男子善女人は父母親友沙門婆羅門に敬愛される。

自利利他の上の下段⁵³⁾では、次々に現われる反対の論争者と等しい力のある、能力有る者

48) Tib. : de ci'i phyir zhe na / kau shi ka shes rab kyi pha rol tu pyin pa 'di ni sems can thams cad kyi drung na byams pa'i sems kyis byams pa nye bar bsgrub pa dang sñing rje'i sems kyis sñing rje ñe bar bsgub pas nye bar gnas par 'gyur ro/ 施護訳：何以故。橋尸迦、此般若波羅蜜多者、於一切衆生是大慈心。行大慈行。是大悲心。行大悲行。(大8,p.599a5)。

49) Vd.p.40,1.13;Pk.46a5;大599c13.

50) Vd.p.41,1.5;Pk.49a5;大600a21.

51) Vd.p.41,1.30;Pk.50a5;大600b7.

52) Vd.p.42,1.18;Pk.50b7;大600b24.

53) Vd.p.42,1.19;Pk.50b8;大600b26.

古 坂 紘 一

となり、如法に制止し、他に反問された時にはその反問に答えることができるであろう (paraiś ca pratyānujyamāṇaḥ pratyānu yoga-vyākaraṇa-samartho bhaviṣyati)⁵⁴⁾。Aを行うことにより、このような現世利益を得ることができる。

自利利他の上の中の段⁵⁵⁾では、
善男子善女人がこの般若波羅蜜多を書き記して書物のかたちとし、供養を先行させ安置し更に供養すれば、

prajñāpāramitāṃ likhitvā pustakagatāṃ kṛtvā pūjāpūrvamgamāṃ sthāpayiṣyati
pūjayiṣyati⁵⁶⁾

四大天王の中、阿耨多羅三藐三菩提心に住しているものもそこに来たいと思い、Aを行い、眺め、合掌し、礼拝し、Aを行って再び進もうと思うであろう。同様に三十三天、夜摩天、兜率天、化樂天、他化自在天の場合もそのようにするであろう。また大梵天、梵輔天、少光天等の色界の諸天、デーヴァ、ナーガ、ヤクシャ、ガンダルヴァ、アシュラ、ガルダ、キンナラ、マホーラガという人間ではない霊的なもの（人非人、八部衆）の場合もそのようにするであろう。四大洲ばかりでなく、三千大千世界の神々の中、阿耨多羅三藐三菩提心に住している神々も同様にするであろう、と般若波羅蜜多の書写と經典供養を讃美する。

自利利他の上の上の段⁵⁷⁾では、

かの善男子善女人の家あるいは宮殿はよく護られる (surakṣita) 等の現世利益を受ける。八部衆がこの般若波羅蜜多を聴きたい、読誦したいとその場所にやって来ているということ、善男子善女人はどうして知なのか (jāniyat) というと、そこに広大な光明を見 (ud āram avabhāsaṃ samjānīte)、かつて嗅いだこともない、人間のものではない香気 (am ānuṣaṃ gandhaṃ ghrāsyaty anaghrāta-pūrvam) を嗅ぐことによって知る。善男子善女人の内的・外的の清浄な振る舞いのために八部衆がやって来て喜ぶ。けれども輝きの少ない先住の神々 (alpaujasikā devatā adhyuṣitā) は、光多い神々の光と威厳と輝きに堪えることができないために、そこから立ち去らねばならないと考える。善男子善女人は般若波羅蜜多に対する恭敬と尊重を充分なるものとするために、この教えの道理（般若波羅蜜多）の安置してある所の周辺で、不潔で不浄な行為を行ってはならない。善男子善女人には身体の疲労も心の疲労も生じない。快く横になり、快く歩み、悪夢を見ないであろう。また（夢を）見る時には、如来たち、ストゥーパ、菩薩たち、如来の弟子たちを見、（夢

54) Vd. p.42, l.20-21.

55) Vd.42,l.24;Pk.51a2;大600b29.

56) Vd.p.42,l.24; Tib: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di byis nas glegs bam du chud par byas te mchod pa sngon du 'gro bas bzhag par 'gyur ba de la (Pk.51a3); 施護訳：以此般若波羅蜜多書写經卷安置供養（大8,p.600b-c）。

57) Vd.p.44,l.21;Pk.53a8;大601a7.

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の經典読誦と *Abhisamayalāṅkāraloka* の信解理解

に) 音声を聞く時には、まさに波羅蜜という声を聞き、まさに菩提分法を見、多くの菩提樹を見るであろう。そしてそれらのもとで如来たち、アラカンたちが阿耨多羅三藐三菩提を現等覚するのを見るであろう。かくて現等覚者たちの転法輪を見、そして実に多くの菩薩たちがこの般若波羅蜜多を共に宣説し合い、

bahūṃś ca bodhisattvān eva drakṣyati imām eva prajñāpāramitāṃ
saṃgāyamānān⁵⁸⁾

般若波羅蜜多を共に宣説することを喜び、「このように一切智者性は理解され、このように仏国土は浄化されるべきである」と方便善巧に説きつつあるのを(夢に)見るであろう。

prajñāpāramitā-saṃgīti-ratān-evam sarvajñatā parigrahītavyā, evam buddha
kṣetraṃ viśodhayitavyam, ity upayakauśalaṃ ca upadīśataḥ/⁵⁹⁾

…またこのような夢を見る善男子善女人は、快く眠り、快く目覚めるであろう。精力に満たされた身体を快く感じ、軽快に感じるであろう。しかも、彼には食物に対する過度の欲望をもった心が生ずることはないであろう。彼には食物に対するわずかな思いがあるだけである。たとえば、ヨーガ(瞑想)を行ずる比丘が、精神統一(禪定)より立ち上がるときは、心は注意の集中に満たされて、食物に対する強い欲望が起らない。彼には食物に対するわずかな思いがあるだけである。

…かの善男子善女人は、般若波羅蜜多の修習というヨーガに沈潜しているので、

prajñāpāramitā-bhāvanā-yogānuyuktatvāt⁶⁰⁾

八部衆たちは、身体に精力を注ぎ込まねばならぬと考えるであろう。

amanuṣyāḥ kāye oja upasaṃhartavyaṃ maṃsyante/⁶¹⁾

…かの善男子善女人は、このような現世利益を得る。

この段で般若波羅蜜多を書写し安置・供養する善男子善女人は般若波羅蜜多の修習というヨーガに沈潜しているとされることは、書写・供養とヨーガが直結するものであることを示している。

58) Vd.p.46, L.1; Ālokaはsaṃgāyamānān iti parasparaṃ granthārtha-nirmayāt/(「共に宣説し合い」とは、互に章句の意味を決定することにより、ということである)と註釈する。(Vd.p.373, l.31)

59) Vd.p.46, l.2; Tib.: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'gro ba la dga' ba'i byang chub sems dpa' sems dpa' chen po mang po dag shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di nyid 'gro bar byed pa dang 'di ltar thams cad mkhyen pa nyid yongs su gzung bar bya 'di ltar sangs rgyas kyi zhing yongs su spyang bar bya'o zhes thabs mkhas pa nye bar stong pa mthong bar 'gyur ro / (Pk.54b3-5); 施護訳: 或見諸菩薩摩訶薩受持此般若波羅蜜多法門。或聞宣説般若波羅蜜多。撰一切智。或見仏刹広大清浄。或聞諸仏世尊以善巧方便説菩薩法。(大8,601a)。

60) Vd.p.46, l.16; Pk.55a5); 施護訳: 住般若波羅蜜多觀行相応故(大8,601b)。

61) Vd.p.46, l.17; Pk.55a5; 即得天竜神等増益色力。是故於諸飲食不生念想(大8, 601b)。

古 坂 紘 一

4.8 続く章句⁶²⁾は第3章の終結の部分であるが、*Āloka*の解釈では、利他の信解の下の下
の段として、次の章へと連続するものとされる。その本文を要約すれば、次の通りである。

善男子善女人がこの般若波羅蜜多を書き記して書物のかたちとし、供養を先行させ安置し
更に供養するならば、たとえAを行わなくとも、ストゥーパを建立する人よりも多くの功
徳を得る。しかし、Dを行い、Aを行う善男子善女人が、(般若波羅蜜多を)他のために
精しく解説し、意味を解釈し、心で吟味し、勝れた知識によってそれに熟慮を加え、Eと
考えて、般若波羅蜜多を書き記して書物のかたちとし、安置し、またこの般若波羅蜜多に
Bを行い、Cを行い、さらに種々の仕方でも供養するならば、(単に供養するだけの)人より
も多くの功德を得る。このような勝れた現世利益を得ようと思う善男子善女人は、この般
若波羅蜜多に誠信をささげて信頼し、信解すべきである。

iyam eva prajñāpāramitā abhiśraddhātavyā avakalpayitavyā adhimokṭavyā/⁶³⁾

このように、書写・供養のヨーガよりさらに高度な經典崇拜の条件として信解が要請されて
いる。

4.9 次に第4章では、利他の下の中から上の上まで説かれるとされる。ここでは読誦のこ
とは触れられず、専ら般若波羅蜜多の勝れた徳性が称賛される。要旨のみを記すと、

利他の下の中の段⁶⁴⁾：

シャクラ（帝釈天）は世尊の問いに答えて、ジャンブドヴィーパー杯に満たされた仏舍利
よりも、書き記された般若波羅蜜多を取る。それは般若波羅蜜多が如来の道理、如来の真
実の身体だからであり、仏世尊は法身よりなるものだからである。

利他の下の上の段⁶⁵⁾：

般若波羅蜜多から生じた如来たちの舍利が供養を受ける。したがって般若波羅蜜多が供養
されることによって、それらの如来の舍利も完全に供養される。身体は全智者性を生ずる
容器（依処）ではあるが、知を生ずるための縁でも因でもない。如来たちの身体は般若波
羅蜜多に満たされているから供養を受ける。

利他の下の中の段⁶⁶⁾：

ジャンブドヴィーパ乃至三千大千世界まで如来の舍利で満たされたものよりも般若波羅蜜
多を取る。

利他の下の中の段⁶⁷⁾：

62) Vd.p.46, l.19; Pk.55a6; 大601b26.

63) Vd.p.46, l.32-47, l.1.

64) Vd.p.48, l.1; Pk.56a6; 大601c12.

65) Vd.p.48, l.12; Pk.56b4; 大601c24.

66) Vd.p.48, l.25; Pk.57a4; 大602a8.

67) Vd.p.49, l.6; Pk.57b3; 大602a18.

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

風(vāta)⁶⁸⁾、熱(pitta)⁶⁹⁾、痰(śleṣma)⁷⁰⁾ (の病い) を鎮める等、種々の貴重な徳をもつ宝
石(maṇi-ratna)のように、般若波羅蜜多および一切智智にはこれらの徳がある。

利他の中の上の段⁷¹⁾：

仏世尊や説教者の説教は般若波羅蜜多の所産であるから供養される。説教者は法身の威神
力によって大群衆を怖れないから供養を受ける。

利他の上の下の段⁷²⁾：

全智者性は般若波羅蜜多に遍満されており、仏舎利の供養は全智者性にもとづいて生ずる。

利他の上の中の段⁷³⁾：

カウシカ (帝釈天) 曰く「仏陀を法性 (真実身) として見ようとする善男子善女人は般若
波羅蜜多を行じ (prajñāpāramitāyāṃ caritavyaṃ)、この般若波羅蜜多においてヨーガ
を行い、

prajñāpāramitāyāṃ yogam āpattavyam: shes rab kyi pha rol tu phyin pa 'di la
rnal 'byor du bgyi'o⁷⁴⁾

修習しなければならない。」

世尊曰く「過去・未来・現在の諸仏も私も、この般若波羅蜜多に達して (imām eva
prajñāpāramitāṃ āgamyā) 阿耨多羅三藐三菩提を現等覚するのである。」

利他の上の上の段⁷⁵⁾：

菩薩は長い間般若波羅蜜多を行じ、そのために般若波羅蜜多によってすべての有情の心の
動き (citta-caritāni) を正しく知り、観察する。六種すべての波羅蜜を菩薩摩訶薩は追求
するのであるが、その場合般若波羅蜜多が先立つ。方便善巧に把持され、般若波羅蜜多の
方へ廻向され、全智者性の方へ廻向された六波羅蜜多には何の区別もない。

5 まとめ

5.1 以上に見たように、*APS* および *Āloka* では経典に対する供養という形での経典崇拝を
前提として、経典の読誦、書写等が行なわれるべきことが述べられている。儀礼の形で大乘経

68) Tib.: bser ma.

69) Tib.: mkhris pa.

70) Tib.: bad kan.

71) (Vd.p.50,1.3; Pk.58b7; 大602b29).

72) (Vd.pp.50,1.17; Pk.59a2; 大602c8).

73) Vd.p.50,1.27; Pk.59a7; 大602c18.

74) Vd.p.50,1.29; Pk.59a8; 於此般若波羅蜜多安住相應 (大8,602c21).

75) (Vd.51,1.7; Pk.59b6; 大603a1).

古 坂 紘 一

典をちょうど仏像のように安置して經典に向かって供養し読誦が行なわれる理由は、以上のAPSに述べられているような經典崇拜の思想によるものであることが判る。

APSの般若波羅蜜多の修習の根幹にadhimukti（信解）が要請されているということを、*Kārikā*をもとにして *Āloka* は注解している。その意味で、*Kārikā* および *Āloka* においては、高次元の般若波羅蜜多の読誦・供養等の実践は、adhimuktiを根幹として機能するものであり、またadhimuktiなくして成立たないと考えられている。

そしてAdhimuktiには段階があり、より低次元のadhimuktiの段階からより高次元の段階へと向上する經典崇拜のあり方が説かれている、と*Kārikā* および *Āloka* では捉えられている。その段階は、自利→自利利他→利他へと上って行くが、その3段階のそれぞれに下・中・上の段階づけが行なわれ、さらにそれらにまた下・中・上の段階づけが行なわれ、合計27段階のadhimuktiが数えられる。

經典読誦は魔的なものの退散等の現世利益をもたらすが、そのような読誦は比較的低い次元の自利利他の下の中の信解の段階に位置づけられている（4. 6 参照）。しかしそれより次元の高いadhimuktiを伴う經典崇拜は仏塔崇拜よりも勝れた価値を持つとされている。

經典の読誦のadhimuktiは自利利他の段階に留まるのに対し、書写のadhimuktiは利他の段階にまで及ぶものとされている（4. 8 参照）。したがって經典崇拜の行為のうち、特に書写を重んじるべきことが示唆されている。

しかしさらにそれよりも仏陀の阿耨多羅三藐三菩提の直接の原因としての般若波羅蜜多に対する崇拜は、読誦を離れていても、より高次元のadhimuktiとして位置づけている（4.6, 4.9 参照）。しかしその「般若波羅蜜多」は『般若波羅蜜多經』と一体のものとして考えられている。

◇略号表

APS: *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā Sūtra*.

Āloka: *Ārya-Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā-vyākhyābhisamayālaṅkāra-loka-nāma*.

Conze : Edward Conze, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*, Calcutta 1958.

Dg: 西藏大藏經、デルゲ (sDe dge) 版。

Kārikā: *Abhisamayālaṅkāra-kārikā*.

MVy: *Mahāvīyutpatti* (『翻訳名義大集』鈴木學術財団, 1962)

Pk: 西藏大藏經、北京版。

Skt.: サンスクリット。

Tib.: チベット語訳。

Vd.: P.L.Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā With Haribhadra's Commentary Called Āloka*.

大: 大正新脩大藏經。

Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā の経典読誦と *Abhisamayālaṅkāra* の信解理解

大谷:大谷大学監修『北京版西藏大蔵経総目録・索引』。

東北:東北帝国大学法文学部編『西藏大蔵経総目録』。

『仏典』: 平川彰訳「八千頌よりなる般若波羅蜜経」中村元編『仏典 II』(世界古典文学全集 7) 筑摩書房, 1965 所収。

『大乘仏典』: 梶山雄一・丹治昭義訳「八千頌般若経」『大乘仏典』 2, 3, 中央公論社, 1974, 1975.

◇主要参考文献:

P.L.Vaidya ed., *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā With Haribhaadra's Commentary Called Āloka*, Buddhist Sanskrit Texts, No.4, Darbhanga 1960.

梶山雄一訳「八千頌般若経 I」『大乘仏典』 2, 中央公論社, 1974.

施護訳『仏母出生三宝藏般若波羅蜜多経』大 8 卷 (No.228).

Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa, 東北No.12, 大谷No.734.

キーワード: 経典崇拜 般若波羅蜜多 読誦 書写 信解

